

献呈の辞

一雨ごとに暖かさを増し、そこそこで桜の便りが聞かれる季節となりました。春は生きとし生けるものが胎動する歓喜あふれる季節であります。反面、長年ご指導頂いた先生がたとの別れを余儀なくされる惜別の季節でもあります。専修大学文学部では今月末日をもって長島博、林義雄、亀井明徳、ボレッタウイリアムの四人の先生方が定年を迎えられることになりました。

長島博先生は、昭和一四年東京にお生まれになり、東京教育大学を卒業された昭和三七年に本学の体育の専任講師に就任されました。爾来、四八年の長きにわたって本学の教員を務めて来られました。バスケットボールの選手として名声は申すまでもありませんが、本学就任後は大学における教養教育の充実に全力を傾けて来られたように思います。それは教養課程の「大綱化」が大きな問題となった平成二〜六年の四期にわたって教養課程委員会委員長をおつとめになり、本学の教養教育の礎を築いてこられたことから明らかであります。また先生は組合活動を通じて本学教員の待遇改善に対しても大きな貢献をなさいました。先生のご専門は、体育選手の技術・体力向上に関する理論であります。最近では、中・高年の健康とスポーツ、地方行政における高齢者対策と福祉、生涯学習と町づくりなどきわめて広範囲に及んでいます。文学部は平成二二年四月より新たに「人文・ジャーナリズム

「学科」を設置し、そのなかに「生涯学習コース」の開設を予定していますが、その編成に当たっては多くの助言を頂きました。先生ご自身に新学科の学生をご指導いただけないのは、かえすがえすも残念でなりません。

林義雄先生は、昭和一四年福島県いわき市にお生まれになり、東京教育大学文学部をご卒業になつたあと、同じ大学の大学院文学研究科日本文学専攻に進まれ、以来、一貫して日本語学を専攻され、特に中世の古辞書の系譜についての研究に心を傾けられました。その成果として、数々の論文によつて古辞書間の関係を明らかにされるとともに、なかなか閲覧のかなわない貴重な古辞書を日本語史の資料として活用できるように、影印・翻字して刊行するお仕事もなさいました。その後、中世の日本語のうちの口頭語（話し言葉）へと興味を広げられ、キリシタン資料や抄物、さらには朝鮮資料などを縦横に駆使して、研究を深めておられます。先生が専修大学に着任されたのは、昭和五年です。それから、ちょうど三〇年在職されたことになりました。この間、文学部国文学科・日本語日本文学科および大学院文学研究科日本語日本文学専攻において日本語学の教育に尽力されました。また、永く国際交流委員として海外の大学との交流の方面でも大きな貢献をなさいました。こうした先生のご尽力によつて韓国の湘南（ホナム）大学と文学部との組織間協定が成立し、積極的な交流の道が開かれたのも愉快な思い出であります。

亀井明德先生は、昭和一四年に当時の東京市にお生まれになり、静岡大学文理学部を卒業後、九州大学大学院文学研究科修士課程に進まれ、昭和四五年に同課程を修了されるとともに、福岡県教育長庁文化課に入職にされ、九州歴史資料館参事補佐をへて、昭和六三年に専修大学文学部に就任されました。亀井先生は、贅言するまでもなく「貿易陶器」研究の世界的権威として知られています。先生の研究によつて美術鑑賞の対象に過ぎなかった貿易陶器が歴史をひもとく確実な資料、そして新しい研究領域にまで高められたことは間違いありません。生産窯から消費地まで、すなわち、生産窯とその技術、商業組織、港津までの運搬、輸出システム、航路・船舶、輸入地・組織、国内商業組織などなどから、その周辺に介在している人々の動きまで、陶器にかかわる全ての人々の営みが明らかとなる研究であります。対象地域は日本は言うに及ばず、中国の龍泉窯・景德鎮、沖縄、新安沖沈没船、モンゴル、インドネシア、ヴェトナム、そしてシルクロードやセラミック・ロードを介して遠く中央アジア、中近東からヨーロッパにまで及んでいます。その研究意欲は古希を迎えられた今日でもいささかの衰えもなく、ますます発展しているように見受けられます。さらに頭がさがりますのは、このような研究・教育・公務をこなされながら、そのために授業を休講されることがまったくなかったことです。なかなか出来ることではなく、頭がさがる思いです。

ボレッタ・ウイリアム先生は、一九三九年にアメリカ合衆国にお生まれになり、一九九〇年に本学に就任なさいました。当時の英米文学科はアメリカ文化を講ずることのできるネイティブスピーカー

を求めていると仄聞しています。ボレッタ先生は学生のコミュニケーション能力は勿論ですが、ポップスなどの音楽や映画、コンピュータ機器を用いた英語教育に造詣が深く、アメリカの最新の文化や情報を学生に教授し、その軽妙な授業は多くの学生を魅了してまいりました。先生はネイティブという立場に甘んじることなく、毎年のようにアメリカの学会に参加し、最新のアメリカ文化を授業に取り入れるための努力を怠りませんでした。学内ではLL教室運営委員を二期、情報科学センター員を二期つとめられるなど、学生のコミュニケーション能力と情報伝達能力の発展に多大な貢献をされたと言ふことができようかと思ひます。

専修大学文学部は平成二二年四月からこれまでの四学科六専攻から、新たに七学科体制に生まれ変わりスタートすることになりました。こうした重要な時期に文学部の柱石ともいふべき四人の先生に文学部を去られることはかえすがえすも残念でなりません、今後は名誉教授として種々のご助言を賜りたいと思ひます。四先生の今後の益々のご発展とご健勝を祈念して献呈の辞といたします。

平成二二年三月

専修大学文学部長 矢野 建一
